



[事務局からのお知らせ]

彙報

10月12日の総会における報告事項及び議決事項は次の通り。

[報告事項]

- (1) 平成15・16年度役員選挙結果について
- (2) 平成15・16年度理事長として興膳宏現理事長が再任。
(役員一覧は23頁参照)
- (3) 平成14年度日本中国学会賞は、
内山 直樹 「漢代における序文の体例——『説文解字』
叙「敘曰」の解釈を中心に」
宮 紀子 「モンゴル朝廷と『三国志』」
(ともに『学会報』第53集掲載)
に決定いたしました。

[議決事項]

- (1) 平成13年度決算及び平成14年度予算案承認。
- (2) 平成14年度事業計画承認。

- (3) 次年度の大会開催校は、筑波大学(平成15年10月4日
5日)に決定。

◎会費納入について

会費未納の方は、至急ご送金願います。なお、数年にわたった未納の方は特にご注意ください。4年間滞納されると、除名になります。

郵便振替口座：00160-9-89927

◎『学会報』送付停止について

平成13年度会費未納の方には『学会報』を送付いたしません。会費納入が確認され次第、送付いたします。また、納入の際には、振替用紙通信欄に未送付の『学会報』号数をご記入下さい。それによって発送いたします。

◎住所変更について

住所・所属機関等の変更は亟やかにご通知下さい。通知は書面もしくはFAXにてお願いいたします。電話及び会費振替用紙でのお届けはご遠慮ください。

日本シノロジーの位置

理事長 興膳 宏

フランスの中国学者の友人と話していると、最近若い世代の中国学者で日本語のできる人が少なくなった、という話をよく聞く。フランス人の中国学者なら、中国語さえできたらよさそうに思えるが、実はそうではない。いや、そうではなかった、というのが正確だろうか。

フランスの大学で中国学を専攻する学生、ことに将来の研究者を目指す学生は、以前は中国語とともに必ず日本語を履修するのが長い習わしになっていた。

というのも、中国を研究するためには、日本の中国学者の著書や研究論文に目を通す必要があったからだ。これは、何もフランスに限ったことではなく、ヨーロッパやアメリカのシノロジーすべてに共通していえることだった。ただ、ここでは私が比較的良好に知っているフランスを例にしているにすぎない。それだけ日本の中国研究の水準が高かったことを暗示する事実でもある。

だから、私より少し上の世代に属するフランス人中国学者は、ほとんどすべてといってよいほど日本語がよくできる。また、若いころ日本の大学や研究所で研鑽を積んだ学者も少なくない。彼らが研鑽の場を日本に求めたのは、日本の学者のすぐれた成果から学びたいという積極的な動機とともに、新中国の成立以来、いわゆる西側諸国と中国との間に国交のない状態が長くつづいていて、中国に留学したくてもできないという消極的な理由もあったはずだ。

フランスが他の西側諸国に先駆けて中国を承認したのは、ド・ゴール時代の一九六四年一月のことである。中国研究者の中には、それ以後にフラ

ンス語の教師として中国に長期滞在した経験を持つ人もある。しかし、それから二年後には、以後十年間にも及ぶ文化大革命の嵐が吹き荒れたことから想像できるように、外国人の専門研究者が自由に自分の研究に専念できるような雰囲気は、まだ中国社会になかった。その意味では、日本の中国研究者が中国本土に留学できなかったのと、条件的にはほとんど同じだった。

中国が広く西側諸国からの留学生を受け入れるようになったのは、八〇年代になってからである。日本も当然その中に含まれている。人数はもちろん日本人ほど多くはないが、フランスでシノロジーを志す若者たちも、堰を切ったように中国に留学するようになった。現在四十代以下の中国学者で、中国留学経験のない人は皆無といってもよからう。同時に、それは皮肉にも彼らの目を日本や日本語からそむけさせる機縁にもなった。

フランス人にとって、ヨーロッパの言語とまったく体系を異にする中国語と日本語を同時に学ぶのは、確かにたいへんな負担である。それも、東アジアの言語という共通性があるだけで、実はすっかり性質のちがう二種の言語をともに習得するには、よほどの努力と時間が必要である。だから、直接の研究対象である中国の言語をマスターすれば、それでよしとする傾向も当然強くなるだろう。私の知る若い世代の学者で、中国語・日本語の双方に通じる人はもちろんいる。だが、彼らはいかんせんもはや少数派なのである。

もう一つ、中国学者の間で日本語が敬遠される遠因として、日本の専門書の高価なことがある。高すぎて個人で買えないだけではない。図書購入

の予算にゆとりのないフランスの大学や研究機関では、日本で出版された書物を買って控える傾向がある。以前、パリの中国研究所図書館の書庫を見せてもらったが、収蔵されている日本の専門書は概して古いものが多く、最新の日本中国学の研究成果が利用できるような体制にはなっていない。その点では、おそらく財力の豊かなアメリカの主要な大学・研究機関の場合とはかなり大きな開きがあるかと想像する。

それに対して、中国で刊行される書物は廉価で、しかも最近では種類も多い。少ない予算でできるだけ多くの専門書をそろえようとすれば、中国の書物が絶対多数を占めるようになるのも、自然の流れかもしれない。パリには二つの中国書専門店があるが、その店頭に並ぶのはヨーロッパやアメリカで出された中国関係の書と、中国や台湾の刊行物だけで、日本で出版された中国に関する書物はまず見られない。いくつかある日本の書店に、そうした専門書がまったく置かれていないことはいうまでもない。

ここまでは、日本語のできる中国学者がとみに減少しつつあるフランス側の事情である。そうした事情はあるにしても、わが方としては、やはり内に省みるべきことがあるだろう。日本の中国研究は、単にフランスといわず、かつてのように世界に向けて発信し、世界中の中国学者を惹きつけるだけの力量と魅力を失ったのかという疑問である。中国研究の領域が急速に拡大と細分に向かいつつある状況に鑑みれば、それは簡単に答えられることではないかもしれない。だが、またそれだけに、これからの日本の中国学が、過去の名声だけで優越性を誇れるようなものではないことも事実である。

青木正児は、かつて「支那文学研究に於ける邦人の立場」（一九三七年）という文章で、「或る一国の文学を研究する上に、外国人が邦国人に対して劣等感を抱かしめられるのは已むを得ぬ所であ

る」とした上で、外国人研究者が邦国人研究者に対して優越するためには、新しい研究方法と未開の分野を拓くことが必要であると主張した。この問題提起の重要性は、現在でも基本的に変わっていない。日本人学者の研究成果が中国の学界で注目を浴びる機会は、確かに従来よりずっと多くなっていることは事実であるにしても、青木の提言の意義はいま改めて深刻に省みられるべきであろう。

もう一言つけ加えるなら、フランスの中国学者が日本離れをしている以上に、日本の中国学者はフランス・シノロジーの状況に疎い。その近來の成果に関しては、フランソワ・マルタン「近十年のフランスにおける中国文学研究の発展」（『中国文学報』57・58。原文は『日仏東洋学会通信』23・24/25）などを参照されたいが、注目すべき業績は決して少なくない。おそらく他の欧米諸国の中国研究についても事情は同様であろう。さらにいえば、非中国語圏における中国研究の成果に、日本の中国学者の大多数は不案内のままということだろう。それが我々の優越意識の裏返しでないことを祈るのみである。

200回を通過した中国文芸座談会

竹村 則行 (九州大学)

九州大学中国文学会が主催する中国文芸座談会が、2002年9月の例会で200回を数えた。今日、どの大学等でも研究会等が頻繁に開かれており、中には更に長い歴史と栄光を誇る会もあるが、今回は更に長い歴史と栄光を誇る会もあるが、今回、記念小文の報告を許された機会に、些か会の歴史を振り返り、将来の展望を模索しようと思う。他の同種の会の参考になれば幸いである。

さて、ここにいう中国文芸座談会は、昭和39(1964)年8月に開かれた第1回「第二次中国文芸座談会」以降、2002年に至る38年間にカウントされたものである(『日本中国学会報』18、国内学会消息)。「第一次」中国文芸座談会(九大中国文学研究会、代表目加田誠先生、昭和29-43年に『中国文芸座談会ノート』を17冊発行)については、『中国文学論集』創刊号(昭和45年)に寄せた目加田先生の序文に、「中国文芸座談会は、～今日まで、実に通算百十五回、ノートの方は、これも次第に停滞しがちになりながら、十七号を重ねた」とあるように、通算115回の研究会の実績があり、これを加算すれば、今日の200回は315回となる。この第一次中国文芸座談会については、その命名が毛沢東の文芸講話に由来することからも分かるように、当時の中国現代文学への深甚な関心のもとに熱心に研究発表会を重ねたものであることは、先の日加田序文がこれを証する。

これを発展的に継承した「第二次」中国文芸座談会は、昭和41年10月に九大中文へ赴任された岡村繁先生を中心にして、ほぼ隔月に一度開かれ、今日に至っている。主催団体名は九州大学中国文学会。研究誌として『中国文学論集』を昭和45(1970)～平成13(2002)年の32年に31号を発刊。

全国的な中国文学研究の趨勢を受けて、その内容も中国文学全般に亘る学問研究を中心とするものとなっている。小文が報告の対象とするのは、この「第二次」中国文芸座談会である。

さて、我々人間は常に個人として生まれるが、個人のままでは生きられず、必ず周囲の社会環境の影響を受ける。それは家庭であり、友人であり、学校であるが、特に研究者の道を進んだ場合、大学や研究会、学会等の影響は甚大である。以下には、報告者も38年間のうち31年の会員である九大の「第二次」中国文芸座談会の雰囲気等について、主観的ながら報告者の一見を述べる。

会はほぼ隔月に一度、土曜の午後が開かれる。百名超の会員のうち、常時出席者は20数名ほど。先の200回記念大会では50名を超えた(右写真)。発表題は2～3題。卒論や修論の構想発表や学会間近の研究発表、また会員が論文や著書等を公開した場合、特に発表をお願いする時もある。数十年も前は訪中報告等が珍しかったが、近年は院生の留学報告が多くなった。また、滞日中の訪問研究者や外国人教師に発表をお願いしたり、近年は中国人研究者の報告を拝聴する機会が増えたのは、日中国交回復30年の時代の趨勢であろう。

各人の発表は小一時間、質疑約半時間で、毎回午後の半日を費やす。発表テーマは発表者が自ら決め、質疑時間もたっぷりあるので、参会者ともかなりの勉強になる。学会発表の時間枠が大幅に拡大した態である。広範且つ膨大な過去の蓄積の上に成り立つ中国学では、どのテーマであれ、雑博(雑駁)な知識(即ち雑学)が不可欠である。それは時に中国文学に止まらず、西洋哲学や天文

学、生物学等、何でもござれの雑学を要する。旧帝大に象徴される総合大学は、この点、総合という名の雑学性、雑種性に甚だ富む。どの大学（の中文）でも同様であろうが、研究室や研究会において教員や学生間で話される所謂耳学問（口学問）は、この総合学問の基礎を豊饒且つ強固ならしめる大切な要素である。長く雑多なテーマ研究の蓄積を有する我が中国文芸座談会は、この中国雑学、耳口学問に寄与するところ甚大である。



以下には中国文芸座談会の効用と問題について述べるが、全国の多くの研究会も同様であろう。

まず、研究発表という行為は、発表者が自ら調査し、構想した研究テーマを皆の前で公表し、質疑を受けることから成り立つ。発表者は自らの主観テーマを公表することによって、それが客観化される快感（又は苦痛？）を味わうし、参加者はそのテーマについて学的恩恵を受ける。そして、このような行為を繰り返し蓄積することによって、相互に研究者として認識し、広大な裾野を持つ中国文学世界がほの見えて来るのである。

歴史を有する研究会、学会の更なる効用は、歴史の流れの一部である自分を相対的に実感することである。中国文芸座談会は第一次14年、第二次38年を数える。この間、学部生は2～3年、院生は更に5～6年、教員は多く数十年の期間を、会

の貴重な構成員としてリレー式に参加する。200回の大会に参加して痛感したことだが、中国文芸座談会は目加田先生がレールを敷き、岡村先生が機関車となってここまで驚進して来た。宮沢賢治の銀河鉄道よろしく、乗客は時に短期あり、時に長期あり、また人知れず静かに乗車したり、傍若無人の客ありで、まことに社会の縮図である。そして、時々の乗客が皆、時々の貴重な歴史の証人であることは、日本中国学会はじめ、全ての研究会等が同様であり、報告者を含め、我々は現在という時点での一通過者であるに過ぎない。

続いて、中国文芸座談会をめぐる種々の問題について述べる。まず、切実な問題として事務担当助手の削減がある。九大中文では、大学改組のしわ寄せとして、今年度から研究室助手の配置が中断しているが、日常の研究室業務を含めて、研究会の実施には多くの雑務処理が欠かせない。勢い、現教員、院生等の負担増となる。現在は静永助教授の献身的な協力によってかろうじて研究会が維持されているが、研究業務の健全な処理のためには、専担助手の存在は不可欠である。

次に、これに深く関連するが、コンビニ店に象徴される今日社会の便利、合理、実利の「三利」が学問研究の世界まで浸透した結果、長い歴史を有して解読に困難が伴う中国文学等の学問分野を若者が敬遠し、進学学生が漸減する傾向がある。我が九大でも慢性的な症状に悩む。我が会が先に発刊した『わかりやすくおもしろい中国文学講義』（中国書店、02年5月）はせめてもの対策である。解決の特効薬は急には見出し難いが、それでも中国文学研究を志す次の世代の若者に希望を託し、その面白さを存分に味わうことができる場として、中国文芸座談会は今後も必要である。

次の300回は新キャンパスで迎える。今後も銀河鉄道の乗客が更に増え、富士の山頂はともかく、広大な中国文学の裾野の花畑を巡るトロッコ車が健全に営業を続けることを祈るばかりである。

魯迅と「二十四孝」

梁 音（名古屋大学大学院生）

『日本中国学会報』第五十三集に掲載された拙稿「二十四孝の孝—老策子孝行説話の場合—」を見て、この論文を書いた経緯を思い起こしました。論文は昨年十月六日、福岡大学で行われた第五十三回大会で口頭発表した「二十四孝の孝—老策子孝行説話を中心に—」に基づくものですが、正直に言って、二十四孝という名は、留学以前中国にいたころには、殆ど聞いたことがありませんでした。両親に尋ねたところ、文化大革命中に儒教の「流毒」として批判されていたとのことでした。

一九二六年五月二十五日、かの魯迅は「二十四孝図説」（竹内好訳、筑摩書房版『魯迅文集』第二巻所収）なる短編を発表しています。その文頭には「何はともあれ私は八方手をつくして、最も暗い、暗い、暗い呪文を手に入れ、まず白話を反対し白話を妨害するすべての連中を呪いたい」とあり、その感情の激しさに驚くのですが、続いて「白話を妨害する連中の流す害毒は洪水猛獣どころではなく、非常に広大かつ長期にわたり、ほとんど全中国を化して麻胡とし、子供という子供をその餌食にしてしまう」として、子供の頃、彼が最初にもらった絵本「二十四孝図説」の感想を述べ始めます。

魯迅は子供の頃、「少しでも絵のある本」はことごとく禁止され、「人前で大っぴらに見ることができた」のは因果応報の因縁話を説く『文昌帝君陰騭文図説』や『玉歴鈔伝』だけでした。そこで「二十四孝図説」をもらったときは、絵があるので「うれしくてたまらなかった」のですが、そこで示されているあまりにも現実離れた「孝」の模範例を見て、子供ながらにそれが実現不可能

であることを感じて、「子ども心に何となく孝子になりたいと考えていたそれまでの計画がご破産」になりました。

中でも「不可解、かつ反感さえ覚えた」のは老策子でした。手に「揺咄丙」（古の鼗鼓）を握り父母の前に横たわる老人を描いた「老策、親を娛ます」図を見た時、魯迅はその不自然さに「子どもへの侮辱」を感じたといいます。さらに嬰兒の鳴き声を発するため「詐り歩き」とあるのも、「児童心理」に矛盾するものでした。不審に思った魯迅は師覚授の『孝子伝』にあたり、それが「今説よりいくらか人間的」であることを確認し、テキストの変遷の裏に「不人情を道徳と思い込むことによって古人を傷つけ、あわせて後人をたぶらかす」「道学者先生」のにおいをかぎつけました。つまり、彼は複数の孝子伝を比較し、その「孝」の内容を分析するという、ちょうど私が今回の論文で試みたのと同様のことを行おうとしていたのです。

ただし、もしこの掌編のなかに、不自然不人情で荒唐無稽な二十四孝への批判のみを読みとるならば、魯迅にこれを書かした問題の本質を見誤ることになります。一九二六年は、魯迅の身辺が大きく変動した年でした。この文章は、前年の「北京女子師範大学事件」をきっかけに学校側に立った陳西滢ら『現代評論』派との論戦の一環をなすもので、冒頭の「白話を反対し白話を妨害するすべての連中を呪いたい」という言葉もそうした文脈で理解されるべきでしょう。孝子伝を改悪して民衆に旧弊な「茶番」を推奨する「道学者先生」と、「口語に対して危害を加えるやから」とは、

魯迅の中で重なっていました。

三月十八日には、魯迅が「民国以来もっとも暗黒なる日」(『花なき薔薇の二』)と言った三・一八事件が発生し、女師大の学生劉和珍が殺されたことを受けて、四月一日に「劉和珍君を記念する」を書いた後、五月十日に「二十四孝図説」は書かれました。立間祥介氏によれば(学習研究社版『魯迅全集4』所収『朝花夕拾』解説)、三・一八事件のあと、魯迅自身にも危険が迫り、緊急避難のために病院を転々としていたようで、本作も「あちこち渡り歩いていた間の作」(『朝花夕拾』「小序」)なのです。即ち、魯迅の「二十四孝」批判は白話運動を背景とし、子供の天性に反する偽善に満ちた封建道徳の「孝」を批判したものであり、時に命がけの社会批判運動とも直結していたのです。魯迅は決して「孝」を全面的に否定するわけではなく、彼が求めていたのは人間の自然な感情の発露に基づく敬親敬老の行動にほかなりません。

その「詐り」の臭いを放つ表現により魯迅の批判の矛先に上がった老萊子の「孝行」の内実を明らかにすることこそ、今回の私のテーマでした。名大の恩師である佐野公治先生と日本文学の立場から古孝子伝資料を精力的に研究されている仏教大の黒田彰先生に同行して、山東省は嘉祥県を訪ね、現存最古の孝子伝資料である武氏祠画像石を実見し二枚の老萊子図を確認しました。一枚は老萊子が立って両親に何かを行っている図、もう一枚は跪いた老萊子が両親に食事を差し上げている図です。両図とも礼儀正しい立ち居振る舞いの老萊子を描いており、老人が小児のまねをするという魯迅が嫌悪感を催した「詐り」の行動は見られません。

「二十四孝図説」と武氏祠画像石、この両者の描き表すものの大きな相違に興味を抱いた私は、歴代の老萊子孝行説話を調べてみました。すると二十四孝の諸テキストには老萊子の服装として「襦衣」という表現があり、「襦衣」は「深衣」と

関連することがわかりました。また、中国では既に散逸し日本にのみ残された古孝子伝資料である陽明本『孝子伝』には、老萊子の服装の表現として「純素せず」という言葉があり、これは「深衣」の縁飾りに関連する言葉です。これらのことから、武氏祠画像石で描かれているのは、深衣を着て親に「燕礼」を行う老萊子の姿ではないかと考えたのです。

後から気づいて驚いたのですが、「二十四孝図説」を収録する『朝花夕拾』の「後記」において魯迅は、「漢代の人は宮殿や墓前の石室を、よく古来の帝王、孔子の弟子、烈士、孝子などの絵画や彫刻で飾った。無論宮殿は跡形もないが、石室は稀に残っている。その一番完全なものは山東省嘉祥県にある武氏の石室である。そこには老萊子の話も刻されていたように記憶するが、いま手許に拓本はなく、『金石萃編』もないので調べようがない。もしあれば、今日の絵と一千八百年前の絵を比較できて面白いのであるが」と記しているではありませんか。私が小論で試みたことは、まさに魯迅が八十年前に意図してなしえなかったことでした。当時もし、魯迅が武氏画像石の図版を手に入れていたならば、老萊子孝行説話に対する彼の考え方は、少しく異なるものになったでしょう。魯迅の考え方を通して、古典は単に過去の遺物として陳列研究される標本ではなく、読者を含めた現実社会の人間にとって、どう位置づけられ意味づけられるものであるかを真剣に考えねば、本当に古典を学んだことにはならないと気づきました。

最後になりましたが、孝子伝研究の先達として惜しみなくご教示を賜った下見隆雄先生と、平素から研究の細部に至りご指導をいただいている名大の竹内弘行・吉田純両先生にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

日本中国学会の本年度の学術大会（第54回）は、10月12、13の両日、青葉山下の東北大学川内北キャンパスで行われました。幸い好天気にも恵まれ、参加者もはじめての予想をかなり上回りました。開会に際して、主催校代表の中嶋隆蔵氏が「研究発表の場としての原点に立ち返り、簡素にして厳粛な学術大会を目指す」という趣旨の挨拶をされましたが、その言葉通り充実した意義深い大会になったのではないかと思います。大会の準備に当たっては、発表者に前もって発表原稿を提出していただき、それを「予稿集」という冊子にして配付していただきました。これらの従来にならぬ煩雑な業務を担当して下さいました東北大学の関係者各位に厚く御礼申し上げます。

ただ、大会の成功とは全く関わりないことですが、東北大学では、教室使用料が今年から突然大幅に値上げされて、30万円あまりもかかったそうです。今のところまだ、すべての国立系大学の教室使用料が値上げされたというわけではないようですが、大学事情も移ろいやすい昨今のことゆえ、大会運営に影を落とすようなことがいつ起こらないともかぎりません。今後、開催校の事情によっては、予算面で柔軟な措置を取る必要が生じるかも知れません。

さて、明年度（平成15年）の第55回大会は、ご承知のこととは存じますが、下記の大学で行われます。

筑波大学では、昭和61年（1986）の第38回以来、17年ぶりの大会となりますが、来秋にもまたどうぞ奮ってご参加下さい。

なお、筑波大学の次の開催校も、準備の都合などのためにできるだけ早く選定する必要がありますが、今度の委員会で二松学舎大学にお願いすることとし、理事会に諮り、承認されました。最終決定は、明年10月に筑波大学で開かれる評議会で為されますが、開催予定校として一応お含み置き下さい。

それ以後の開催校につきましては、幸いにも今のところ、やってもよいとの意向を示されている学校が一、二ございますので、候補校が全くないわけではありません。ただ、大会委員会としては全ての大学の状況を存じ上げているわけではありませんので、人づてに情報を得たり、過去のデータを参照したりしながら、無理を承知でお願いしているような次第です。もし進んで大会開催を希望される学校がございましたら、遠慮なくお知らせいただければ幸甚に存じます。

開催校 筑波大学（向嶋成美代表）
開催予定日 2003年10月4日（土）5日（日）

(1)「日本中国学会報」論文執筆要領の一部修正について

「日本中国学会報」論文執筆要領の4を一部修正しました。査読作業の便宜のため、ワープロ使用の場合、用紙をA4版に限定し、書式に関する規定を定めました。「日本中国学会便り」本号に掲載してありますので、平成15年1月20日締切の第55集への投稿より改訂執筆要領に従ってください。

(2)「日本中国学会賞選定内規」の制定について

これまで学会賞に関する明文規定はなく、旧「学術専門委員会」の申し合わせによって運営されてきました。新会則では、学会賞受賞者の選定は論文審査委員会が行うとされましたので、あらかじめ評議員による推薦を求め、これを参考にして選定することとしました。そのため、明文内規を10月11日開催の理事会にはかって決定し、同日の評議員会で了承されました。内規全文は下記のとおりです。学会規定では、論文審査委員会による選定後、「評議員会の審議と承認を必要とする」とありますが、評議員会及び表彰を行う大会の日程上この条項を守ることは不可能であるため、下記条文のように定めました。但し、学会会則の若干の修正は、他の面でも必要となってきましたので、近いうちに改めてまとめることとし、学会賞受賞者の選定については平成14年度から運用としてこの内規に従って行うことが、評議員会で承認されました。

【日本中国学会賞選定内規】

平成14年10月11日理事会決定

1. 日本中国学会賞は、日本中国学会の会員である少壮研究者のおさめたすぐれた研究業績を顕彰し、その研究を奨励することによって、わが国における中国学の発展に資することを目的とする。

2. 本賞は各年度の『日本中国学会報』に掲載された一般投稿論文の内、少壮研究者によって書かれた論文及びこれに関連する研究活動において示されたすぐれた業績に対して与えられる。
3. 少壮研究者とは原則として40歳までの者とする。但し、これを若干上回っても研究歴においてはほぼ同等と見なされる研究者もこれに含む。
4. 受賞者は毎年原則として哲学・思想部門、文学・語学部門各1名とする。但し、該当者のないときは授与しない。
5. 授与候補者の選定は、評議員による推薦をもとに、論文審査委員会が行ない、理事会によって決定する。その結果は理事長が評議員会に報告するものとする。
6. 本内規の改廃は理事会の決議によって決定し、理事長が評議員会に報告するものとする。

(3)論文審査委員会平成14年度活動日程について

- | | |
|------------|--|
| 平成14年12月2日 | 平成14年度学会賞推薦アンケート発送（評議員）。 |
| 平成15年1月20日 | 『日本中国学会報』第55集投稿締切／学会賞推薦アンケート回答締切。 |
| 平成15年1月26日 | 第2回委員会。査読者の決定（査読者3名は原則として評議員の中から依頼し、論文の内容によっては一般会員からも査読者になっていただきます）。 |
| 平成15年3月14日 | 査読報告締切。 |
| 平成15年3月23日 | 第3回委員会。第55集掲載論文の決定／平成14年度学会賞受賞者候補者の選定／第56集依頼原稿執筆者の選定。 |
| 平成15年5月31日 | 掲載原稿（修正原稿）提出締切／依頼原稿提出締切。 |

[研究推進・国際交流委員会]

寛 文生

I. 学会ホームページの運用に関して

昨秋、学会ホームページの仮運用を開始したが、正式公開のためには技術的に困難な問題も多く、専門家の協力を得るためにワーキンググループを発足させることとし、HP担当の三枝裕美（名古屋大）委員の他に、次の5名の会員に委員を委嘱した。

池田 巧（京大人文研）・内田慶市（関西大）・斎藤希史（国文学研究資料館）・千田大介（慶応義塾大）・二階堂善弘（茨城大）

9月20日に開かれたWGの意見を踏まえ、また10月11日の理事会・評議員会での討議を経て、「日本中国学会報」掲載論文のネット公開に関しては、次のような結論を得た。

- ① 今後の掲載論文については、学会報の投稿規定に盛りこむ。
- ② 過去に掲載された分については、著作権に配慮しつつ、公開の方向で検討し、セキュリティの問題については、すでに学会誌の公開を進めている情報学研究所等にも問い合わせながら進める。

なお、国立国会図書館関西館から電子雑誌「日本中国学会報」を自動収集ソフトウェア（ロボット）により収集し、そのデータを保存し、その全部または一部を無償で関西館のサーバー上で利用提供することができるようにしたい旨の依頼があり、これを了承。

II. その他

- ① 戸川芳郎副委員長が役員規定により今年3月で退任、松岡榮志委員をその後任に委嘱。
- ② 5月にマカオ、11月にハノイで開催されたIRG国際会議（情報技術に関する国際標準化機構と国際電気標準会議）に松岡榮志副委員長が出席。

以上

[将来計画特別委員会]

池田 知久

2002年度第2回委員会議事要録

日 時：2002年10月12日（土） 12：40～13：50
場 所：東北大学 川内北キャンパス A106教室
出席者：6名

委員長 池田知久（東京大学）
副委員長 堀池信夫（筑波大学）
委員 佐藤錬太郎（北海道大学）
委員 野間文史（広島大学）
委員 向嶋成美（筑波大学）
委員・幹事 久保田知敏（聖心女子大学）

欠席者：3名

委員 山口久和（大阪市立大学）
委員 渡部英喜（盛岡大学）
副理事長 大上正美（青山学院大学）

議題

報告事項

2002年10月11日の日本中国学会理事会の審議をふまえ、池田委員長から以下の報告がなされた。

- (1) 前回の委員会での検討をふまえ、理事会に本委員会の活動計画を報告した。
- (2) 会則の検討に関連し、総会や会報を通じて会員からの意見を募る方向になった。
- (3) 事務局の問題については、人的な組織の問題は事務局本部で検討を進める。

審議事項

以下の各点について委員に諮り了承された。

- (1) 議事要録の承認
今年度第1回将来計画委員会議事要録案が提示され、承認された。
- (2) 新会則の検討
今年度は会則検討を第一の課題とする。そのため臨時の委員会を3月21日に持つ。次回委員会までに、委員全員が個別に会則全文を検討したものを書面にし、事前に幹事に提出する。さらに総会や会報を通じ全会員に会則の問題点について意見を求める。このためのメールアドレスを新たに開設する。
- (3) 事務局問題
事務局のありかたについては、人的な組織の問題などは事務局本部に一任する。
今後は場所や在庫会報の処理などの問題に絞って検討する。

[出版委員会からの報告]

川合 康三

『日本中国学会報』第五十四集から「学界展望」は哲学・文学・語学の三部門すべてについて、従来の文献目録のほかに、かなり長文のコメントが加えられています。これは初期の学会報がそうであったように「展望」は文章化すべきだという興膳理事長の意向を受けて、担当校にお願いしたものです。単行本や論文の刊行も年々増大して従前とは桁違いの膨大な点数にのほほえていますので、それを収集するだけでも大変な仕事ですが、それに加えて担当校の代表者にはコメントの執筆という負担を強いることになりました。とてもその全体を鳥瞰して見通しをつけることなど不可能だと固辞される方もありましたが、出版委員会の立てた方針は、必ずしも全体の把握でなくてよい、或る一つの見方から気付いたことを書いていただければそれで十分だというものでした。担当者は二年ごとに交代しますから、その蓄積によって様々な視点からの展望が開けてくるのではないかと期待したのです。

「展望」には署名を入れてありますが、原稿の段階で出版委員全員が目を通し、意見を交換して必要があれば書き直していただくことにしました。それによって文責は出版委員会が負うこととなります。これはあまりに偏狭な記述を避けるための方法とご理解ください。

このようにしてできあがった「学界展望」を改めて読んでみますと、自画自賛を承知で言えば、やはり文章化することによって目鼻がはっきりしてきたような、これまでとはひと味違う「展望」に変身したと思っ

ていますが、いかがでしょうか。

目録の部分につきましても、時代ごとに区切った従来の分類のままでもよいのか、研究の新しい趨勢が見落とされはしないか、さらに検討が必要です。より使いやすい目録になるように工夫を重ねていきたいと思

いますので、ご意見をぜひお寄せください。

「会員便り」も誌面を一新しました。体裁だけでなく、内容も会員の方々が読みたくなるような、また読んで役に立つような、そうした記事を盛り込もうと目指しています。自薦他薦を問わず、こちらにもご意見や原稿をお寄せください。

[選挙管理委員会業務報告]

選挙管理委員会 福井 文雅

選挙管理委員会は以下の選挙について、下記の日程にしたがってその準備と実施を行った。

1. 評議員選挙

平成14年6月9日(日)

斯文会館にて発送業務を行った。

平成14年7月7日(日)

斯文会館にて開票を行った。

選挙結果は大会要項発送時に同封した。(本「大会便り」所載「平成15・16年度 日本中国学会役員名簿」参照)

2. 理事長選挙

平成14年9月1日(日)

斯文会館にて発送業務を行った。

平成14年9月15日(日)

斯文会館にて開票を行った。

選挙の結果、興膳宏前理事長が再選された。

3. 監事選挙

平成14年10月11日(金)

東北大学文学部で行われた評議員会席上にて投票を行い、開票した。選挙の結果、安藤信廣会員(主席監事)、竹村則行会員、佐藤保会員が選ばれた。

以上

平成14年度学会員動向

●本年度『学会便り』第一号発行以降、12月1日現在の物故会員は以下の通りです。(五十音順 敬称略)

入江 吉郎 内野熊一郎 諏訪 義純
田中 謙二 松浦 知久 渡辺 美里

●退会者リスト

◇退会申出会員

東北地区 江連 隆
関東地区 小倉 芳彦 北村 甫 佐々木研太

◇四年会費未納による退会会員

北海道地区 濱出 充
東北地区 須田 修 石山 伸介
関東地区 阿部さおり 熊井 智彦 巖 錫仁
工藤 潔 若松奈央子 蔭 楽群
成 賢昌 田中 巡彦 白 池雲
李 承 律 梁 一模 脇屋 久和
廣川 亮敏 盧 麗 趙 京華
中部地区 柴田 幹夫 小林 誠
近畿地区 恵良 優子 呉 相武 公庄 博
谷橋美智子 中倉 邦雄 緑川 英樹
林 燐煌 林 忠鵬
九州地区 王 展
国 外 李 顯雨 魯 学海 黎 活仁

●住所不明会員

北海道地区 濱出 充
東北地区 石山 伸介
関東地区 阿部さおり 熊井 智彦 巖 錫仁
蔭 楽群 成 賢昌 盧 麗
若松 信爾
中部地区 柴田 幹夫 小林 誠
近畿地区 恵良 優子 呉 相武 谷橋美智子
湯城 吉信 林 燐煌 林 忠鵬
九州地区 王 展

平成14年度新入会員一覧

10月11日に開催された理事会で入会を承認された方は以下の通りです。

なお、正式に会員として認められるのは、本年度会費納入が確認された時点です。くれぐれも会費納入をお忘れにならないよう、ご注意ください。

大澤 理子 関東 東京大学(院)
〒169-0073 新宿区百人町2-17-12-502

金スノオグ 関東 早稲田大学(非)
〒210-0802 川崎市川崎区大師駅前1-7-16

金 世中 関東 埼玉大学(院)
〒116-0001 荒川区町屋5-9-3-1807

鈴木 康夫 関東 大東文化大学(院)
〒180-0005 武蔵野市御殿山1-11-5-204

須山 哲治 関東 慶応義塾大学(院)
〒230-0003 横浜市鶴見区尻手2-9-15-301

田中 智行 関東 東京大学(院)
〒222-0022 横浜市港北区篠原東3-20-2

暢 素梅 関東 法政大学(非)
〒176-0021 練馬区貫井4-8-3-A

松野 敏之 関東 早稲田大学(院)
〒131-0032 墨田区東向島6-9-13

小崎 智則 中部 名古屋大学(院)
〒462-0014 名古屋市中区桶味4-1116

陳 齡 中部 愛知文教大学(講)
〒487-0032 春日井市高森台9-1-1 105-509

岡本洋之介 近畿 佛教大学(院)
〒569-0043 高槻市竹の内町45-10

櫻木 陽子 近畿 大阪市立大学(院)
〒611-0042 宇治市小倉町堀池15-39

鈴木 康予 近畿 大阪市立大学(非)
〒558-0011 大阪市住吉区苅田5丁目7-21 寿ハイツ302

中尾 弥継 近畿 佛教大学(院)
〒603-8214 京都市北区紫野雲林院町90 大徳寺アパート2F

飯沼 果奈 関東 二松学舎大学(院)
〒125-0042 東京都葛飾区金町3-16-16 メゾンドール101号室

植松 公彦 関東 慶應義塾大学(院)
〒251-0015 神奈川県藤沢市川名888-2 フリート湘南411号

大久保明男 関東 東京都立短期大学(専)
〒108-0072 東京都港区白金2-4-3-321

加藤 阿幸 関東 清和大学(教授)
〒359-1164 埼玉県所沢市三ヶ島1-838-9

小林 佳迪 関東 法政大学(非)
〒182-0006 東京都調布市西つつじヶ丘2-10-2

高橋 幸吉 関東 慶應義塾大学(院)
〒228-0803 神奈川県相模原市相模大野7-33-10-6

沼尻 俊裕 関東 大東文化大学(院)
〒262-0014 千葉県千葉市花見川区さつきが丘1-34-14-501

吉川 龍生 関東 慶應義塾大学(院)
〒259-0312 神奈川県足柄下郡湯河原町吉浜644-2

吉永 壮介 関東 慶應義塾大学(非)
〒125-0032 東京都葛飾区水元3-3-13-302

小酒井淑恵 中部 名古屋大学(院)
〒451-0062 愛知県名古屋西区花の木三丁目9番11号

川北 泰彦 近畿 奈良教育大学(助)
〒639-1053 奈良県大和郡山市千日町22-3

張 猛 近畿 京都女子大学(専)
〒612-8133 京都市伏見区向島鷹場町104-1-2501

小川 貴宏 九州 西南学院大学(院)
〒814-0022 福岡市早良区原6丁目3-26 コーポ上野102号

川邊 史絵 北海道 北海道教育大学(院)
〒060-0062 札幌市中央区南2条西13丁目319-14 北香寮108

松江 崇 北海道 北海道大学(助教授)
〒062-0932 札幌市豊平区平岸2条14丁目2-33 レ・アール牧野212号室

石田 志穂 関東 筑波大学(院)
〒311-3402 茨城県東茨城郡小川町佐才159-6

伊藤晋太郎 関東 慶應義塾大学(院)
〒135-0043 東京都江東区塩浜1-1-13-232

胡 志昂 関東 埼玉学園大学(教授)
〒214-0003 川崎市多摩区菅稲田堤1-3-25-404

児島弘一郎 関東 早稲田大学(院)
〒142-0043 東京都品川区二葉1-17-4

志野 好伸 関東 東京大学(助手)
〒170-0003 東京都豊島区駒込4-2-20-203

田川めぐみ 関東 お茶の水女子大学(院)
〒112-0002 東京都文京区小石川5-16-11 ヴィラ清水203

長井 由花 関東 お茶の水女子大学(院)
〒242-0013 神奈川県大和市深見台1-2-19-302

松浦 史子 関東 東京大学(院)
〒181-0001 東京都三鷹市井の頭3-8-12

青山剛一郎 近畿 京都大学(院)
〒615-8281 京都市西京区松尾木ノ曾町59-9

王 標 近畿 大阪市立大学(院)
〒559-0014 大阪市住吉区北島1丁目5番21-508

川口 敦司 近畿 浄土真宗本願寺派僧侶
〒661-0033 兵庫県尼崎市南武庫之荘1-11-21 エクセル武庫之荘 B202

近藤 聖史 近畿 立命館大学(院)
〒603-8341 京都市北区小松原北町135-30 衣笠コーポ棟210号室

蘇 明明 近畿 京都大学(院)
〒606-8392 京都市左京区聖護院山王町38 マンション熊野206号

堀口 育子 近畿 立命館大学(院)
〒612-8012 京都市伏見区桃山町遠山28-4

山内 貴 近畿 立命館大学(院)
〒604-8462 京都市中京区西ノ京北円町73 フラワー蘭403号室

山本 範子 近畿 大阪市立大学(非)
〒639-0202 奈良県北葛城郡上牧町桜ヶ丘3-6-17

船坂富美子 近畿 神戸大学(院)
〒658-0064 神戸市東灘区鴨子ヶ原2-12-7

上妻 宗周 中国・四国 島根大学(院)
〒690-0823 島根県松江市西川津町1216-7 シティコープ愛信102号

陳 仲奇 中国・四国 島根県立大学(助教授)
〒697-0016 島根県浜田市野原町1572-1-A-11

藤田 裕子 中国・四国 広島大学(院)
〒739-0036 東広島市西条町田口1561

1. 世界中の文字や記号にコードを付し、コンピュータやインターネットでの利用に供するための“UCS (Universal Character Set)”である国際規格 ISO/IEC 10646の第19回国際会議がマカオ特別行政区で開かれた。松岡は、日本国代表の一人として会議に参加し、“Extension B”に含まれる漢字42,711字の字形の最終チェック、“Extension C”の提案の審議を行った。さらに、今回は Japan National Body として“International Basic Subsets of UCS”の提案を行ったが、松岡はその原案の作成に当たった。これは、松岡が主査を務める情報処理学会の学会試行標準 WG5 によってすでに試行標準 (Trial Standard) として公表されている、IP SJ-TS 0005:2002, Basic Subset of Coded Character Set (BUCS) を、国際規格化するための提案である。
2. 日 時：2002年5月6-10日
場 所：マカオ文化センター
ホスト：マカオ特別行政区政府、マカオ大学、マカオ理工科大学
参加者：10カ国・地域 45名 (中国、香港 HKSAR、台湾、韓国、北朝鮮、日本、ベトナム、マカオ、米国・ユニコード、スウェーデン)
3. 主な議題とその結果
 - a) “Extension B”——42,711字を“Extension B”として Plane 2 (0000-A6D6) に追加。
 - b) “Extension C”——追加作業が開始され

た。次回の#20ハノイ会議 (11月) までにチェック作業を行うことが確認された。

c) International Basic Subsets of UCS——6月にダブリンで行われる WG2 に提案されることとなった。その結果、NEEDS, SCOPE, CRITERIA を、12月に東京で開催される会議までにまとめて報告するよう指示が出された。

4. ニュースと問題点

a) 文字集合の拡張 (文字コードの追加) は、今しばらく続けられ、おそらく“Extension C”の level-2 まで行くと思われる。現在は、level-1 を行っているが、いたずらに異体字が増えるだけで、問題が少なくない。そうした巨大な文字集合を実際に使う場合の検索方式などは、まったく考えられていない。

b) 今回提案された International Basic Subsets of UCS は、UCS の BMP (20,902字) と Extension A を合わせた、約27,500字の中からその機能度に応じて、

level-1 教育用基本文字セット
(3,000-5,000字)

level-2 ビジネス用基本文字セット
(7,000-8,000字)

を選別しようというものである。

詳しくは、http://www.itscj.ipsj.or.jp/ipsj-ts/02-05/ips_bsec/ts0005e.htm を参照。

5. IRG の情報については、

<http://www.cse.cuhk.edu.hk/~irg> を参照。

(以上)

2002. 10. 12

1 科学研究費補助金審査区分について

2002年3月に開催された日本学術会議第一部の各研究連絡委員会において、科学研究費補助金の審査区分につき、若干の変更があったことが報告された。

人文社会科学系は、人文学と社会科学の2分野に分かれ、うち人文学は哲学、文学、言語学、史学、人文地理学、文化人類学の6分科に分かたれる。哲学分科は、さらに哲学・倫理学、中国哲学、印度哲学・仏教学、宗教学、思想史、美学・美術史の6細目に分かたれる。また、文学分科は、日本文学、ヨーロッパ語系文学、各国文学・文学論の3細目に分かたれ、中国文学は各国文学・文学論細目に属する。さらに、言語学分科は、言語学、日本語学、英語学、日本語教育、外国語教育の5細目に分かたれ、中国語学は言語学細目に属する。ただし、中国語教育は外国語教育細目に属することになる。

中国哲学に関しては、従来と同じく一つの細目として独立しているが、文学と語学に関しては大きな変化があった。すなわち昨年度は7細目に分割されていた文学分科が3細目にまとめられ、これまで一つの細目として独立していた中国語・中国文学のうち、中国文学のみが新たに設けられた各国文学・文学論細目に繰りこまれた。また、新しく言語学分科が設けられ、中国語学は中国文学から切り離されて、ここに属することになった。この変更は、平成15年度科学研究費補助金募集要項に反映されている。

日本中国学会からの科学研究費補助金審査委員候補者の推薦については、中国哲学については従来通り、中国文学については中国語学関係を除いて従来通りの数を推薦した。中国語学については、日本語学会を窓口学会として、中国語学会から候補者が推薦されることになったため、本学会としては推薦

権がなくなった。今後、同学会と連絡を保ちつつ、適正な候補の推薦を要請することにした。

2 日本学術会議の改革について

首相を議長とする総合科学技術会議では、日本学術会議の今後の在り方について種々検討が行われている。

日本学術会議の中でもそれに対応して論議が行われており、同会議内に設けられた在り方委員会の「中間まとめ」では、会員数を現行の210人から大幅に増やして、2,500人程度とし、その中から互選により210人程度の運営・執行メンバーを選出することが考えられている。これは現在72万人といわれる科学者（研究者）の代表性という点から、現行の3,400人に1人の会員を選出する制度では、欧米諸国との間に格段の差があるため、それを約290人に1人の割で選出するようにするという考えによるものである。

他方、総合科学技術会議の「日本学術会議の在り方に関する専門調査会」が10月16日付けで出した「日本学術会議の在り方について（中間まとめ）（案）」では、会員数を200～300人程度とし、部制も現行の7部制から2部門・3部門の大括りにする構想を示している。この専門調査会案は、3～4週間のパブリックコメント期間を経て、12月下旬ごろに総合科学技術会議の本会議で最終報告として了承される予定になっている。

このように、二つの改革案にはかなり大きな隔たりがあり、改革の成りゆきはなお不透明だが、いずれにしても、本来なら来年中に行われるはずの第19期の日本学術会議会員の選出は、大きく日程と方法が変わることが予想される。

平成14年度 文部科学省研究費補助金採択状況一覽

(単位：千円)

特定領域研究(継続)

- 原本「老子」の形成と林希逸「三子齋口義」に関する研究 4,500
池田知久 (東京大学)
- 仏教における主要概念のインド・中国・日本における伝承と受容 3,800
丘山 新(東京大学)
- 六朝期の著作における伝統の継承と変容 2,700
斎藤希史(国文学研究資料館)
- 中国における制度と古典—科举制度と言語史・文学史の相関から— 4,500
平田昌司(京都大学)
- 中国中世の道家・道教典籍の形成 1,100
堀池信夫(筑波大学)
- 『全明俗曲』の編纂 600
大木 康(東京大学)
- 日本における唐律令・礼の継受と展開 1,100
大津 透(東京大学)
- 中国恋愛文学の発掘 1,100
川合康三(京都大学)
- 中国周縁地域における「華化メカニズム」と学術の伝播 900
木津祐子(京都大学)
- 元明代散曲の解釈 1,400
金 文京(京都大学)
- 『資治通鑑』テキストの受容と改編 1,100
中砂明徳(京都大学)
- 大唐六典の受容と制度通の撰述 1,100
磯波 護(大谷大学)
- 古代・中世の漢文訓読文資料の文体史的研究 800
金水 敏(大阪大学)
- 日中幼学書の比較文化的研究 2,100
黒田 彰(佛教大学)
- 抄物の原典参照データベースの構築—「韻府群玉」と「玉塵抄」を例として— 1,200
出雲朝子(青山学院女子短期大学)
- 中国東北部およびロシア極東のツングース諸語に関する緊急調査 3,200
津曲敏郎(北海道大学)
- 東南アジア島嶼部の消滅の危機に瀕した言語、ネグリート語、台湾原住民語の研究 3,100
森口恒一(静岡大学)

- 西南中国からヒマラヤ地域のチベット系少数民族言語の記述研究 3,100
池田 巧(京都大学)
- 中国広東省の消滅の危機に瀕した言語、シオ語の緊急調査 1,800
中西裕樹(京都大学)
- 中国近世における小学書出版に関する研究 2,400
花登正宏(東北大学)
- 明万曆嘉興蔵の出版とその影響 4,000
中嶋隆蔵(東北大学)
- 中国南部の族譜：版本と手鈔本の社会的機能の比較を中心とした研究 2,300
瀬川昌久(東北大学)
- 戦国から秦・漢への時代転換と写本の変化 2,000
浅野裕一(東北大学)
- 宋代官僚体制確立における出版の役割 2,300
熊本 崇(東北大学)
- 中国教派系宝巻の書誌・目録学的研究 2,700
磯部 彰(東北大学)
- 中国明清両王朝による「国史」の編纂と出版のプライオリティ 1,400
新宮 学(山形大学)
- 東アジアにおける漢籍医薬書の出版・流通と相互影響 2,200
真柳 誠(茨城大学)
- 江戸時代における漢籍の流転—佐伯文庫を例に— 4,000
大塚秀高(埼玉大学)
- 朝鮮に伝来した漢訳西学書・天主教書の研究 3,800
鈴木信昭(富山大学)
- 坊刻書を中心とする明刊本書誌の研究 2,300
井上 進(名古屋大学)
- 明清時代通俗政書・官箴書の研究 2,300
谷井俊仁(三重大学)

特定領域研究(新規)

- 満洲本ユニオンカタログ作成のための基礎的研究 2,200
岸田文隆(大阪外国語大学)
- 「通書」の東アジア的展開 2,300
三浦国雄(大阪市立大学)
- 和漢の辞書・類書の書誌的研究 4,000
関場 武(慶應義塾大学)
- 宋版仏書、とくに東禪寺版の刷印(補刻)に関する調査研究 2,300
牧野和夫(実践女子大学)
- 明末清初の福建を中心とする坊刻本の出版状況の研究 2,300
小川陽一(大東文化大学)
- 『四書集註』の周辺 2,300
吉田公平(東洋大学)
- 中国における印譜の成立とその展開 2,100
高山節也(二松学舎大学)
- 日本支配下中国・満洲における出版文化の諸相 2,300
岡村敬二(京都学園大学)
- 中国近世の知識人社会と出版文化、とくに科举関係資料と類書を中心に 2,300
森田憲司(奈良大学)
- 中国における才子佳人小説の出版と朝鮮・越南・日本への影響 2,300
磯部祐子(高岡短期大学)
- 漢字文化圏における古写本の変遷と初期印刷物に関する調査研究 2,300
赤尾栄慶(京都国立博物館)
- 院政・鎌倉時代の寺院社会における宋版辞書類の流通とその影響に関する研究 700
池田証壽(北海道大学)
- 「和漢軍書」出版の思想的な研究—作者・読者・地域社会— 1,500
若尾政希(一橋大学)
- 元明時代における法律実用書の基礎的研究 1,500
徳永洋介(富山大学)
- 北宋期における古典校刻の学術史的意義に関する研究 1,000
古勝隆一(京都大学)
- 中華書局と中華人民共和国の古籍整理事業—「二十五史」の校点出版の背景 1,300
陳 仲奇(高根県立大学)

- 出版分野における近代日中学術交流の研究 1,400
陳 捷(日本女子大学)
- 墓葬出土書籍より見た戦国・秦漢の出版文化 700
藤田高夫(関西大学)
- 「満州国」時代を中心とする「満蒙」関係刊行物の研究 1,000
原山 煌(日本女子大学)
- 明清時代法律書の研究 1,400
谷井陽子(天理大学)

萌芽研究 新規

- 章炳麟の哲学思想と日本明治30年代思潮との比較考察 800
小林 武(京都産業大学)
- 鎌倉時代における中国禅思想の受容とその展開—臨済系を中心に— 1,100
何 燕生(郡山女子大学)
- 和漢古典籍における「標題文芸」の基礎的研究 1,300
相田 満(国文学研究資料館)
- 「竹枝詞」1000年の歴史 3,300
梅田雅子(早稲田大学)

萌芽研究 継続

- 中国文化構造における「天」と「人」の関わりについての原理的研究 500
関口 順(埼玉大学)
- 明代科学の思想史的研究 1,100
鶴成久章(福岡教育大学)
- 戦国楚系文字資料による漢語史再構のための予備的研究 500
大西克也(東京大学)
- 兼音妙語の分析と校訂 800
樋口 靖(東京外国語大学)
- 認識構造理論による「アイロニー関連語彙」の關係解明とその日・英・中・韓国語比較 500
河上誓作(大阪大学)
- 中国文学における古典文学と児童文学の交渉 500
彭 佳紅(帝塚山学院大学)

若手研究(B) 新規

- 中国清末知識人の生活と生活 600
川尻文彦(帝塚山学院大学)
- 清代後期紹興地方の思想文化に関する研究 200
早坂俊廣(北九州工業高等専門学校)

- 中国農村部における文化大革命と教育に関する研究—オーラルヒストリーによって— 1,600
朝倉美香(名古屋立大)
- 台湾漁民社会における民族知識と「日本」—植民統治の影響とその翻訳をめぐる— 1,600
西村一之(日本女子大学)
- 近代日本における帝国意識の形成過程と植民地台湾との人的移動の関連をめぐる研究 1,200
松田京子(愛知教育大学)

- 漢籍(類書)からみた日本古代における中国文化受容の研究 1,000
水口幹記(早稲田大学)

- 中国古代の官僚制と文化—特に漢代の古官箴を中心に— 1,200
佐藤達郎(大阪樟蔭女子大学)

- 「読経道」の研究—法華経読誦の芸道化に関する総合的研究— 1,500
伊藤佳世乃(柴佳世乃)(千葉大学)

- 日本、中国における「三国志演義」の読書史研究 1,300
上田 望(金沢大学)

- 清代知識人社会における八股文の役割について 500
浅井邦昭(名古屋大学)

- モンゴル時代の出版文化と諸制度の研究 1,100
宮 紀子(京都大学)

- 白居易文学の特質「多情性」を支えた中唐の美意識「風流」の研究 1,200
諸田龍美(愛媛大学)

- 魯迅を核とした中日比較文学研究 700
秋吉 取(佐賀大学)

- 金代の字書・韻書の後世における受容に関する研究 1,000
大岩本幸次(大阪市立大学)

- 清代における歴史物語の変遷と受容—薛家将故事を中心に— 1,700
千田大介(慶應義塾大学)

- 蘇州崑劇の演技・歌法・字音の基礎的調査及び研究 1,200
石井 望(長崎総合科学大学)

- 中国人日本語学習者の発話にみられる「不明瞭さ」の音声学的研究 700
石原淳也(広島大学)

- 中国積石山地域の消滅の危機に瀕した言語、保安語の調査研究 600
佐藤暢治(広島大学)

- 中国西北地方における回族コミュニティの生活文化と地域変容 900
高橋健太郎(早稲田大学)

若手研究(B) 継続

- 出土資料より見た「周易」の形成に関する研究 900
近藤浩之(北海道大学)

- 新出土資料の利用による戦国期儒道交渉史の再検討 800
末永高康(鹿児島大学)

- 北宋時代を中心とした中国仏教絵画の研究 1,000
大原嘉豊(京都大学)

- 中国における高等教育修了学歴の取得ルートの多様化に関する研究 1,000
南都広孝(広島大学)

- 徽州文書を主たる史料とする明清中国の社会結合と村落構造の研究 800
中島楽章(九州大学)

- 易林本節用集とJIS漢字字体について 500
白井 純(北海道大学)

- 近世中期漢学者・文人の学芸と文学 800
田中則雄(島根大学)

- 宋元時代における「三国志伝説」の、「三国志平話」成立に与えた影響についての研究 800
中川 諭(新潟大学)

- 現代中国語移動表現についての研究：言語使用者の認識との関連において 300
丸尾 誠(名古屋大学)

- 抗戦期以降に中国における女性作家研究—張愛玲を中心に— 900
濱田麻矢(神戸大学)

- 清末民初・文言小説の文体に関する研究 400
中里見敬(九州大学)

- 近世における漢語学習の容態—琉球官話と唐話の比較研究 700
石崎博志(琉球大学)

- 「廈英大辞典」に見られる閩南語下位方言の分析 500
村上之伸(流通経済大学)

- 「西崑酬唱集」の研究—銭惟演を中心に— 300
池澤滋子(中央大学)

- 第二次世界大戦以前の香港における言語接触と言語構築 1,000
吉川雅之(東京大学)

基盤研究(A) 新規

- 中国旅順博物館所蔵新疆出土文物に関する総合的研究 15,400
上山大峻(龍谷大学)

- 日本・中国・ヨーロッパ文学における絵入本の基礎的研究及び画像データ・ベースの構築 13,200

- 渡辺守邦(実践女子大学)

- 20世紀台湾の言語・文学・演劇映画に関する総合的研究 9,900
戸倉英美(東京大学)

基盤研究(A) 継続

- 我国伝統中国学の独自性を発信するためのシステム開発 7,300
平勢隆郎(東京大学)
- 17世紀日本における中国・韓国の漢籍受容の分析並びに総合的研究 8,100
江本 裕(大妻女子大学)
- 和本及び和刻漢籍に於ける各種伝記資料の所在に関する調査研究 8,600
新藤協三(国文学研究資料館)
- 環太平洋圏の華文文学に関する基礎的研究 8,100
山田敬三(福岡大学)
- 古典籍・古文書解説のための自習システムの開発 8,500
山崎 誠(国文学研究資料館)

基盤研究(B) 新規

- 『易』の起源・成立及びその解釈の歴史の展開に関する研究 5,300
伊東倫厚(北海道大学)
- 六朝隋唐精神史の研究 2,600
宇佐美文理(京都大学)
- 齋醮の研究 3,900
小林正美(早稲田大学)
- 宋代以降の中国における集団とコミュニケーション 5,800
岡元 司(広島大学)
- 16～18世紀の日本と東アジアの漢文説話類に関する総合的比較研究 6,300
小峯和明(立教大学)
- 1930年代日本における中国人日本留学生の文学・芸術運動に関する総合的研究 4,000
小谷一郎(埼玉大学)
- 六朝の楽府と楽府詩 3,100
釜谷武志(神戸大学)
- 近代北方中国の芸能に関する総合的研究—京劇と皮影戲をめぐって— 5,100
水上 正(慶應義塾大学)
- 満州語記述文法の作成 3,300
久保智之(九州大学)
- 海南島の地方文化に関する文化人類学的研究 2,400
瀬川昌久(東北大学)

- 中国国内所蔵敦煌・吐魯番文献の歴史学的・文献学的研究 1,800
関尾史郎(新潟大学)

- 中華帝国の中央と周縁—現代東アジアの原型を求めて— 3,300
細谷良夫(東北学院大学)

- 中国東北部における日本語資料 Network 化に関する基礎的研究 6,000
松原孝俊(九州大学)

- 吳語婺州方言群・甌江方言群の調査研究 1,200
秋谷裕幸(愛媛大学)

基盤研究(B) 継続

- 戦国楚系文字資料の研究 1,000
竹田健二(鳥根大学)
- 道教的密教的辟邪呪物の調査・研究 2,300
坂出祥伸(関西大学)
- 宋代士大夫の相互性と日常空間に関する思想文化的研究 2,000
佐藤慎一(東京大学)
- 『大乘起信論』と法蔵教学の実証的研究 3,900
井上克人(関西大学)
- 元代禅籍の語学的研究—『從容録』を中心として— 900
佐藤鍊太郎(北海道大学)
- 仏教移入が及ぼした東アジアにおける世界観・人間観への影響の研究 2,000
藤井教公(北海道大学)
- 北京版子ペット大蔵経のデジタルイメージと思想史研究 1,400
宮下晴輝(大谷大学)
- 植民地期中国東北地域における宗教の総合的研究 4,200
木場明志(大谷大学)
- 中央アジア出土文物から見たシルクロード貿易と文化交流の諸相 5,300
森安孝夫(大阪大学)
- 日本漢字音データベース(大字音表)作成のための基礎的研究 2,200
湯沢賢幸(筑波大学)
- 清元節の基礎的研究 1,200
安田文吉(南山大学)
- 中国学に関する南欧所在資料の研究 3,100
高田時雄(京都大学)
- 中国語普通話文法と方言文法の多様性と普遍性に関する類型論的・認知言語学的研究 3,500
古川 裕(大阪外国語大学)

- 歴史文献データと野外調査データの総合を旨とした漢語方言史研究 1,900
太田 斎(神戸市外国語大学)

- 現代香港広東語の語彙体系とその形成にかんする記述的研究 3,800
千島英一(麗澤大学)

- 文学における近代東アジアの相互交流 4,000
菅原克也(東京大学)

- 近代中国東北部(旧満州)文化に関する総合研究 4,000
劉 建輝(国際日本文化研究センター)

- 中国語雲南省・四川省藏族における工芸と芸能の記録保存と文化伝承をめぐる国際共同研究 5,200
服部等作(広島市立大学)

- 東アジア家系記録(宗譜・族譜・家譜)の総合的比較研究 4,800
宮島博史(東京大学)

- 4～6世紀における華北石刻史料の調査・研究 3,600
佐藤智水(岡山大学)

- 中国女文学の実態調査 2,000
遠藤織枝(文教大学)

基盤研究(C) 新規

- 『詩』解釈から見た『郭店村楚墓竹簡』と『戦国楚簡』の成立 1,000
藪 敏裕(岩手大学)
- 国立国会図書館蔵『天台山記』の総合的研究 2,600
薄井俊二(埼玉大学)
- 康有為大同思想の成立とその影響に関する研究 1,400
竹内弘行(名古屋大学)
- 南宋後期における『朱子学』形成の基礎的研究 900
市来津由彦(広島大学)
- 神仙思想の成立に関する研究 1,600
大形 徹(大阪府立大学)
- 旧『満州』における植民地教育体験者の調査 500
竹中憲一(早稲田大学)
- 近現代台湾における宗教儀礼・宗教職能者の歴史学的・文献学的研究 1,700
松本浩一(図書館情報大学)
- 近世中国の接壤地帯における物流・人口往来・言語問題 1,400
川越泰博(中央大学)
- 『通典』礼にみえる杜佑の議論の研究 1,300
北川俊昭(富山商船高等専門学校)

- 明清白話(口語体)小説の近世日本における翻訳を通した近世中国語の用例と受容の研究 1,600
小田切文祥(日本大学)
- 中国の童蒙教訓書に関する研究 1,300
伊東美重子(お茶の水女子大学)
- テキスト構造の中日対照研究—言語と思维の相関関係を探る 2,300
大滝幸子(金沢大学)
- 江戸期における詩経解釈学史的基礎的研究—詩経関係書目及び解題作成と解釈学史的考察 1,600
江口尚純(静岡大学)
- 中国文学における「友情」のかたち 1,600
川合康三(京都大学)
- 中国近代文化史研究—中国近代の自己デザイン 600
遊佐 徹(岡山大学)
- 唐代の芸能・行事と伝奇小説の相互関係の解明 1,900
岡本不二明(岡山大学)
- 『文選』李善注を活用した文学言語の創作に関する研究 1,500
富永一登(広島大学)
- 擬似漢字の字形集合に関する情報理論的研究 1,000
鹿島英一(九州大学)
- 『呉語読本』音声データの作成と公開 1,400
石 汝杰(九州大学)
- 中国映画文化史の基礎的研究 700
張 新民(大阪市立大学)
- 阮籍・嵇康の受容から見た、六朝詩文における言志の伝統と表現営為の意味 1,100
大上正美(青山学院大学)
- 次世代中国古典文献データベース構築の基礎的研究 2,100
村越貴代美(慶應義塾大学)
- 北宋後期～末期における士大夫の文藝とメディア 1,800
内山精也(早稲田大学)
- 中国語圏における遠隔授業に見られる異文化交流の新しい可能性と問題点 1,200
牧田英二(早稲田大学)
- 宋代文献資料による唐代音楽の研究 800
中 純子(天理大学)
- 日中・琉中対音資料による中国語音韻史の総合的研究 500
丁 録(熊本学園大学)
- 中国語発音に基づく中国地名・人名の仮名表記とその体系化に関する研究 1,400
陳 淑梅(東京工科大学)

基盤研究(C) 継続

- 唐代儒道仏三教交渉史上における宗密教学の研究 400
中西啓子(新潟大学)
- 異文化接触からみた中国軍事思想史の研究 1,000
湯浅邦弘(大阪大学)
- 春秋正義の発展的研究 1,000
野間文史(広島大学)
- 朱熹『家礼』の版本と思想に関する実証的研究 500
吾妻重二(関西大学)
- 唐宋道教の心性思想研究 800
山田 俊(熊本県立大学)
- 先秦儒家思想における性命観と存在概念について 500
瀬尾邦雄(鶴岡工業高等専門学校)
- 白隠直筆『法華經細註』の研究 900
堀内伸二((財)東方研究会)
- 東アジアにおける儒教思想の倫理思想史的研究—「人倫」概念を手がかりに— 700
高島元洋(お茶の水女子大学)
- 日本近世における老荘思想の解釈に関する研究 900
大野 出(愛知県立大学)
- 近世後期幕府儒者の思想史的位置に関する研究 700
中村安宏(岩手大学)
- 中国の書画家印・鑑蔵印・落款に関する諸資料のデータベース化とその総合的研究 1,300
湊 信幸(東京国立博物館)
- 敦煌写本の書誌に関する調査研究—三井文庫所蔵本を中心として— 1,200
赤尾栄慶(京都国立博物館)
- 宋元時代の江南仏教世界と舶載仏画 700
井手誠之輔(東京文化財研究所)
- 考古出土物と祭祀儀礼・芸能よりみる中国基層文化の研究 500
稲畑耕一郎(早稲田大学)
- 中国西南地域諸民族誌の基礎研究—主に雲南省を中心に— 900
栗原 悟(相模女子大学)
- 台湾先住民における「民族」概念の形成に関する文化人類学的研究 600
草場英子(原英子)(岐阜市立女子短期大学)
- 日本古代漢語受容史の研究 100
榎本淳一(工学院大学)
- 『入唐求法巡礼行記』に関する文献校定および基礎的研究 900
佐藤長門(国学院大学)

- 中国黄渤海地域における都市化とメディアの多様化の関する研究(1870～1954) 700
貴志俊彦(島根県立大学)
- 『梁書』、『陳書』及び『南史』の史料論的研究 1,100
安田二郎(東北大学)
- 清代漢文文書の研究 1,200
加藤直人(日本大学)
- 中国明清時代の民間宗教と文化・社会構造 700
浅井 紀(東海大学)
- 『王禎農書』に見える中国伝統農具の総合的研究 700
渡部 武(東海大学)
- 日中戦争期における上海に関する総合的研究 800
高綱博文(日本大学)
- 近代中国知識人夫婦における「知」の共有 500
西川真子(名古屋外国語大学)
- 古代日本文学における漢語の受容 500
山崎健司(奥羽大学)
- 『萬葉集』から中古の和歌文学における中国文学受容史の研究 500
大谷雅夫(京都大学)
- 唐話辞書の発展・系統史の研究—唐通事・異国通詞諸家の翻訳語彙の検討— 900
若木太一(長崎大学)
- 上代文学に与えた六朝文学・仏典の影響についての考察 700
瀬間正之(上智大学)
- 唐宋期の詩と詩学に関するメディア論的研究 700
浅見洋二(大阪大学)
- 『日本国見在書目録』著録書及び著録書の著者に関する研究 700
孫 猛(早稲田大学)
- 漢魏晋南北朝詩「詩語」集成 500
松浦 崇(福岡大学)
- 俗文学資料による中国近世音の研究 600
花登正宏(東北大学)
- 中国における家族に関する文学表象の展開についての基礎的研究 400
西上 勝(山形大学)
- 漢字文化圏の言語と「近代」に関する総合的研究 800
刈間文俊(東京大学)
- 『香港文学』の誕生と香港アイデンティティの成熟に関する研究 800
藤井省三(東京大学)

● 民国期中国の昔話に関する総合的研究 700

橋谷英子(馬場英子)(新潟大学)

● 敦煌文書・トルファン文書・正倉院文書の比較写本学研究 700

松尾良樹(奈良女子大学)

● 文学創作の発想法に基づく中国現代文学史の研究 800

岩佐昌あき(九州大学)

● 『古小説鈞沈』本文研究 400

中嶋長文(神戸市外国語大学)

● 連環画の基礎的研究 1,300

武田雅哉(北海道大学)

● 中国魏晉南北朝の修辭文学における形似表現と玄学表現の分析及び相互関連に関する研究 800

佐竹保子(東北大学)

● 毛沢東様式に関する総合的研究 500

牧 陽一(埼玉大学)

● 中国語の「構文」カテゴリと事態認識に関する研究 1,100

木村英樹(東京大学)

● 中国嶺南地域の摩崖石刻の資料化とそれに拠る中国山水文学の実証的研究 800

戸崎哲彦(滋賀大学)

● 南宋・金・元代文学の総合的研究 1,100

金 文京(京都大学)

● 琉球を臨界面とする「境界性中国語」の形成について 1,300

木津祐子(京都大学)

● 瀬戸内海地域の近世漢学者上甲振洋の漢文紀行日記についての研究 300

狩野充徳(広島大学)

● 包拯伝説の民衆への浸透に関する研究 1,100

阿部泰記(山口大学)

● 呉語処衢方言群祖語の再構 600

秋谷裕幸(愛媛大学)

● 漢語諸方言における語声調の実験音声学的研究 1,000

岩田 礼(愛知県立大学)

● 元代音研究 800

遠藤光暁(青山学院大学)

● 中国「早期話劇」における日本演劇の影響 900

飯塚 容(中央大学)

● 清末・民国初期の巷間資料による庶民文化流通形態の研究 1,000

岡崎由美(早稲田大学)

● 中国古典にみる「語られた女」とその文学位相 300

寛久美子(奈良大学)

● 中国帰国者の言語使用調査研究(日本語習得と中国語維持をめぐる言語教育の資料作成) 500

友沢昭江(桃山学院大学)

● 日本語・中国語・韓国語の外來語音韻データベース構築と音韻構造の定量的対照研究 600

SANDERS ROBERT,M(東北大学)

● 苗瑤語と周辺諸言語の言語地理学的研究 500

田口善久(千葉大学)

● 日本語と中国語のとりたて表現の数量的側面に関する認知的対照研究 1,100

定延利之(神戸大学)

● 中期蒙古語における外來的要素が言語構造に及ぼした影響の研究 700

樋口康一(愛媛大学)

● 契丹文字と女真文字の歴史言語学的研究 900

吉本智慧子(立命館アジア太平洋大学)

● 中国語圏における漫画文化の研究 600

日下みどり(九州大学)

● 近世日本への漢訳西洋曆算書の伝来と和算への影響 500

小林龍彦(前橋工科大学)

● インターネットを活用した中国語学習支援システムの開発とより一層の実用化 1,300

ピラル・イリアス(立命館大学)

● 中国近代における身体についての思想文化のジェンダー論による分析 1,200

坂元ひろ子(一橋大学)

● ジェンダーからみた中国の「家」と「女」 2,200

野村鮎子(奈良女子大学)

奨励研究

● 「守城録」の訳注・研究～宋代軍事史料の訳注と書誌学的研究及び語彙索引・解題作成～ 220

斎藤忠和(立命館慶祥高等学校)

研究成果公開促進費 (日本学術振興会取扱分)

● 中国心学の稜線一元朝の知識人と儒道仏三教一 1,400

三浦秀一(東北大学)

● 郭店楚簡儒教研究 2,500

池田知久(東京大学)

● 道学の形成 3,200

土田健次郎(早稲田大学)

● 中国古代礼法思想の研究 1,800

石川英昭(鹿児島大学)

● 清末仏教の研究 2,000

陳 継東(武蔵野女子大学)

● 中国北方農村の口傳文化 2,000

井口淳子(大阪音楽大学)

● 六朝政治史の研究 2,500

安田二郎(東北大学)

● 訳注 中国近世刑法志 下 3,500

梅原 郁(就実女子大学)

● 中国近代教育の普及と改革に関する研究 1,400

小井善文(神戸女子大学)

● 萬葉集における中国文学の受容 3,700

芳賀紀雄(筑波大学)

● 六朝楽府文学史研究 1,100

佐藤大志(安田女子大学)

● 楚辭新研究 1,200

石川三佐男(秋田大学)

● 歐陽脩古文研究 1,700

東 英寿(鹿児島大学)

● 新編李白の文 1,400

市川桃子(明海大学)

● 毛詩正義研究 1,200

田中和夫(宮城学院女子大学)

● 異文化の中にある郭沫若 1,600

武 継平(九州大学)

● 明清章回小説研究 1,300

丸山浩明(県立広島女子大学)

● 魯迅・明治日本・漱石 1,000

潘 世聖

● 孝子伝注解 1,800

黒田 彰(佛光大学)

● 『大正新脩大藏經』テキストデータベース(SAT) 54,500

下田正弘(大藏經テキストデータベース研究会)

● 『東洋学文獻類目』データベース(ABOS) 9,700

井波駿一(中国学データベース作成委員会)

● 中国語音声教育データベース(EDCP) 17,200

湯山トミ子

(中国語音声教育データベース作成委員会)

● 東洋文化研究所蔵漢籍目録データベース(C.C.C.) 13,800

丘山 新(漢籍目録データベース作成グループ)

日本中国学会 平成13年(2001年)度収支決算書

(単位：円)

収入の部	科目	予算	決算
	1. 前年度繰越	5,530,287	5,530,287
	2. 会員会費	12,650,000	12,623,909
	3. 寄付金	1,000,000	1,093,300
	4. 預金利息	2,200	2,751
	5. 著作権料分配金	0	0
	合計	19,182,487	19,250,247

支出の部	科目	予算	決算
1. 事務局総務費	(1) 印刷費	400,000	748,125
	(2) 通信費	800,000	565,165
	(3) 交通費	50,000	50,650
	(4) 消耗品費	120,000	306,729
	(5) 庶務処理費	200,000	101,597
	(6) 雑費	200,000	249,575
	(7) 業務委託料	210,000	210,000
2. 事務局人件費	(1) 幹事手当	1,170,000	1,170,000
	(2) 謝金	700,000	852,200
3. 事務局会議費	(1) 会議費	300,000	2,000
	(2) 役員旅費	600,000	480,810
4. 事業費	(1) 学会報等刊行費	5,470,000	5,708,631
	イ 印刷費	3,620,000	3,801,000
	ロ 編集費	1,300,000	1,300,000
	ハ 翻訳謝金	150,000	150,000
	ニ 発送費	400,000	457,631
	(2) 学術大会運営費	1,200,000	1,200,000
	(3) マルチメディア事業費	300,000	180,400

支出の部	科目	予算	前年度決算
5. 各種委員会運営費	(1) 大会委員会	300,000	15,000
	イ 通信費	10,000	8,000
	ロ 会議・旅費	250,000	3,500
	ハ 謝金	30,000	0
	ニ 消耗品・雑費	10,000	3,500
	(2) 論文審査委員会	540,000	549,067
	イ 通信費	250,000	118,860
	ロ 会議・旅費	250,000	330,906
	ハ 謝金	30,000	78,000
	ニ 消耗品・雑費	10,000	21,301
	(3) 出版委員会	350,000	293,420
	イ 通信費	10,000	9,960
	ロ 会議・旅費	250,000	193,480
	ハ 謝金	30,000	30,000
	ニ 会報編集費	50,000	50,000
	ホ 消耗品・雑費	10,000	9,980
	(4) 選挙管理委員会	80,000	0
	イ 通信費	10,000	
	ロ 会議・旅費	30,000	
	ハ 謝金	30,000	
ニ 消耗品・雑費	10,000		
(5) 研究推進・国際交流委員会	イ 通信費	10,000	2,020
	ロ 会議・旅費	250,000	337,662
	ハ 謝金	30,000	30,000
	ニ 消耗品・雑費	10,000	275
	(6) 将来計画特別委員会	300,000	394,597
	イ 通信費	10,000	3,790
ロ 会議・旅費	250,000	358,957	
ハ 謝金	30,000	30,000	
ニ 消耗品・雑費	10,000	1,850	
予備費		5,592,487	—
次年度繰越金		—	5,802,324
合計		19,182,487	19,250,247

学会基金

収入の部	基本金	4,300,000	支出の部	基本金	4,300,000	備考
前年度繰越金	983,337		日本中国学会賞	160,000		奥野基金 500,000
普通預金利息	2,083		次年度繰越金	835,621		佐藤基金 200,000
信託収益金	10,201					池田基金 300,000
合計	995,621		合計	995,621		伊藤基金 300,000
						積立基金 3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

平成14年5月10日

日本中国学会監事

藤井省三
田中一成
戸倉英美

日本中国学会 平成14年(2002年)度収支予算案

(単位：円)

収入の部	科目	予算案
	1. 前年度繰越	5,802,324
	2. 会員会費	12,650,000
	3. 寄付金	1,000,000
	4. 預金利息	2,500
	5. 著作権料分配金	0
	合計	19,454,824

支出の部	科目	予算案
	1. 事務局総務費	2,810,000
	(1) 印刷費	1,000,000
	(2) 通信費	900,000
	(3) 交通費	50,000
	(4) 消耗品費	200,000
	(5) 庶務処理費	200,000
	(6) 雑費	250,000
	(7) 業務委託料	210,000
	2. 事務局人件費	2,160,000
	(1) 幹事手当	1,080,000
	(2) 謝金	1,080,000
	3. 事務局会議費	800,000
	(1) 幹事手当	200,000
	(2) 謝金	600,000
	4. 事業費	7,150,000
	(1) 学会報等刊行費	5,650,000
	イ 印刷費	3,800,000
	ロ 編集費	1,300,000
	ハ 翻訳謝金	150,000
	ニ 発送費	400,000
	(2) 学術大会運営費	1,200,000
	(3) マルチメディア事業	300,000

支出の部	科目	予算案
	5. 各種委員会運営費	1,870,000
	(1) 大会委員会	80,000
	イ 通信費	10,000
	ロ 会議・旅費	50,000
	ハ 謝金	10,000
	ニ 消耗品・雑費	10,000
	(2) 論文審査委員会	570,000
	イ 通信費	120,000
	ロ 会議・旅費	350,000
	ハ 謝金	80,000
	ニ 消耗品・雑費	20,000
	(3) 出版委員会	340,000
	イ 通信費	10,000
	ロ 会議・旅費	250,000
	ハ 謝金	30,000
	ニ 会報編集費	40,000
	ホ 消耗品・雑費	10,000
	(4) 選挙管理委員会	80,000
	イ 通信費	10,000
	ロ 会議・旅費	30,000
	ハ 謝金	30,000
	ニ 消耗品・雑費	10,000
	(5) 研究推進・国際交流委員会	400,000
	イ 通信費	10,000
	ロ 会議・旅費	350,000
	ハ 謝金	30,000
	ニ 消耗品・雑費	10,000
	(6) 将来計画特別委員会	400,000
	イ 通信費	10,000
	ロ 会議・旅費	350,000
	ハ 謝金	30,000
	ニ 消耗品・雑費	10,000
	予備費	4,664,824
	次年度繰越金	—
	合計	19,454,824

学会基金

収入の部	基本金	4,300,000	支出の部	基本金	4,300,000	備考	
	前年度繰越金	835,621		日本中国学会賞	160,000		奥野基金 500,000
	普通預金利息	2,000		次年度繰越金	687,621		佐藤基金 200,000
	信託収益金	10,000					池田基金 300,000
							伊藤基金 300,000
	合計	847,621		合計	847,621		積立基金 3,000,000

平成15年・16年度 日本中国学会役員名簿

理事長	興膳 宏		
副理事長	大上 正美	金 文京	
理事	池田 知久	笥 文生	
	川合 康三	北岡 正子	
	合山 究	土田健次郎	
	富永 一登	中嶋 隆藏	
	堀池 信夫	丸尾 常喜	
監事	安藤 信広	佐藤 保	
	竹村 則行		
評議員	相原 茂	青木 五郎	
	吾妻 重二	安藤 信広	
	池田 秀三	池田 知久	
	伊東 倫厚	稲畑耕一郎	
	井波 律子	今鷹 眞	
	大上 正美	大島 正二	
	小川 晴久	小川 陽一	
	大木 康	尾崎 文昭	
	笥 文生	加地 伸行	
	川合 康三	北岡 正子	

金 文京	興膳 宏
合山 究	後藤 秋正
小南 一郎	坂元ひろ子
佐藤 保	柴田 篤
高木 重俊	高橋 均
高山 節也	竹内 弘行
竹下 悦子	竹村 則行
土田健次郎	戸倉 英美
富永 一登	中嶋 隆藏
野間 文史	花登 正宏
福井 文雅	藤井 省三
古屋 昭弘	堀池 信夫
松本 肇	丸尾 常喜
三浦 國雄	向嶋 成美
山田 敬三	吉田 公平

平成14年11月1日
選挙管理委員会作成

「会則」の問題点等の指摘に関する会員各位へのお願い

将来計画委員会委員長 池田 知久

新会則施行後若干年が経過し、運用上の問題点が指摘され、ご意見も多々聞こえてくるようになりました。現在、将来計画委員会では「委員会規約」(6) a に基づいて、会則変更を視野に入れた会則の全面的な検討を進めておりますが、今年度の総会において理事長よりご提案がありましたように、会員の方々がお気づきになった会則についての問題点をご指摘いただき、各位のご意見をできるだけ今後の検討に反映していきたいと存じます。より多くの会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

ご意見・問題点の宛先

郵便：〒113-0034 東京都文京区湯島 1-4-25 斯文会館内
日本中国学会将来計画特別委員会 委員長 池田知久

FAX：03-3251-4853

E-mail：kubota@u-sacred-heart.ac.jp

2003年3月末日までお願いします。

「日本中國學會報」論文執筆要領

日本中國學會

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。
ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は、用紙サイズはA4、1行30字毎ページ40行、文字は10.5ポイントを用い、400字詰原稿用紙に換算した全体の枚数を第1ページの見易い場所に明記すること。
5. 図版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示すること。
ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。
校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。
原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は正漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を正漢字体（旧字）に統一する。
活字は本文9ポイント、括弧内は8ポイント、注はすべて8ポイントを使用する。
特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所を明記すること。

9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いないこと。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語？音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例 孫逸仙 Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。
日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 掲載決定の論文については、英文タイトル及び英語または中国語による論文要旨（英語の場合タイプライター用箋・ダブルスペース2枚以内、中国語の場合800字以内）の提出を求める。要旨には訳文を添えること。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内
日本中國學會
14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想または文学・語学）の別を原稿第1ページに朱書すること。ただし、論文の内容により、両部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨とも複写コピーを用意し、計4部を提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。

校正

16. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。加筆・訂正の結果加算された印刷費は、執筆者の負担とすることがある。

抜刷

17. 掲載論文の執筆者に対しては、抜刷30部を贈呈する。抜刷の追加を希望する場合は、初校返送時に追加所要部数を連絡のこと。その分については、実費及び増加送料を本人負担とする。

(昭和62年10月11日制定)

(平成13年5月13日修正)

(平成14年10月13日一部再修正)